

塗り絵で地域交流

学生と入居者共同で

日本老人福祉財団 大阪〈ゆうゆうの里〉



生活サービス課
コミュニティ担当
門田拓也氏



生活サービス課
藤井美紀課長

一般財団法人日本老人福祉財団（東京都中央区）が運営する有料老人ホーム「大阪（ゆうゆうの里）」（大阪府守口市）は、地域の商店街振興組合が主催する「つながる、ぬりえ展」に参加。地域の学生が描いた下絵のイラストを入居者に提供し、色を塗った作品を商店街に展示。学生と入居者をオンラインでつなぐ企画も実施した。

「つながる、ぬりえ展」は、大阪（ゆうゆうの里）と以前から関わりがある近畿社会福祉専門学校（大阪市）が発案したイベント。「コロナ禍で入居者の外出や人との交流の機会が減っている」という施設職員の声や専門学校の協力を得て、大阪市内の中高生やアートスクールの



オンラインで学生と交流

学校に届いたことが企画のきっかけとなった。「塗り絵を通してつながる」ことを目指し、地域の複数の高齢者施設や学生などが参加した。専門学校の協力を得て、大阪市内の中高生やアートスクールの330点。7月末から

8月上旬まで、大阪市の天神橋筋商店街で展示された。実際の展示の雰囲気が入居者に伝わるよう、商店街と入居者をオンラインでつなぐ、作品や鑑賞する人々の様子を配信。入居者からは「商店街を盛り上げるのに貢献できたようで嬉しい」との声があがった。

オンラインで交流する企画も実施。入居者が色を塗った時の気持ちや、次のイラストのアイデアを学生に伝えるなど、コミュニケーションが生まれた。「自粛が求められる中、塗り絵を通して人をつなげる機会を提供することができた」とコミュニティ担当の門田拓也氏は話す。

また、同施設では今回のイベントでイラストの提供を受けたアートスクールの講師を呼び、月に1回、塗り絵教室を実施。本格的な立体感の出し方などのレクチャーを受ける。「コロナ禍での新たな趣味として始める人が増えた。塗り絵が好きな人同士の交流も生まれている」と生活サービス課の藤井美紀課長。「今後も塗り絵を始めとし、コロナ禍でも楽しめるアクティビティを実施していきたい」と話した。